

研究専攻（専門領域）		文化環境研究専攻		学籍番号	07CS021
氏名	山下 泰葉	ローマ字	YAMASHITA Yasuha	国籍 (留学生)	
修士学位論文名	ピーテル・ブリューゲルの風景－風土という視点－				
提出年月日	2009年1月13日		指導教員	伊藤 博明	
体裁 (論文)	58頁（1頁文字数1600字） ＋図版11頁		言語	日本語	
別冊添付資料等					
キーワード	ピーテル・ブリューゲル 風景画 風土 和辻哲郎				
<p>本論文の目的は、ピーテル・ブリューゲルが制作した2点の連作風景画について、和辻哲郎の風土論という視点から考察することで、その風景画がネーデルラントの風土特有性を本質的に反映した作品として明確にすることである。</p> <p>第1章では、ピーテル・ブリューゲルについての先行研究や資料を参考にしながら、まずピーテル・ブリューゲルの風景画についてその制作契機や経緯などの概観及び詳細を把握する。そこで明らかになることは、ピーテル・ブリューゲルの風景画について雇用主やパトロンからの要望という外的要因に求める論考が指摘されているということである。しかし、和辻哲郎の風土論という空間論的視点で以って、ピーテル・ブリューゲルの風景画を捉えたとき、彼自身に制作契機があるという内的要因の存在を見出すことの可能性を示唆した。</p> <p>因って、第2章では和辻哲郎の風土論の把握に努める。それによれば、風土とは人間の自己了解の契機である。主観的思考をもった人間が風土という客観へと向かうことで、人間は自己としての存在と社会に所属する間柄としての存在であることを認識する。そして複数の社会が存在することは同時に複数の風土が存在することでもあり、本論文で扱うピーテル・ブリューゲルが位置づけられるヨーロッパ及びネーデルラントという社会は、「牧場」の風土類型であり陰鬱という特有性を備えているという。ヨーロッパの中でも北へ向かうほど強くなるこの特有性は人間気質にも関係性をもつと考えられ、南欧と異なってアルプス以北の地に精神性・哲学性を一層備えた非視覚的な芸術の発展として反映すると論じられる。そうであるとき、ネーデルラント絵画が光の描写や人間への教訓性を含むことを特徴とすることもまた、陰鬱の風土特有性との関係を考慮することができる。この関係の把握を第3章にて始めに考察する。</p> <p>第3章において、ネーデルラント絵画の外面的特徴を「光の表現」、内面的特徴を教訓性を帯びた「内へと向かう精神性」に見出した後、それらの特徴がピーテル・ブリューゲルの連作風景画2点に本質的に反映されていることを論じる。つまり＜大風景画＞と＜季節画＞は、描かれた絵画空間がイタリア的絵画構図法を基盤にしたものである本質的な「光の表現」であり、また全く別々の事情背景で制作された両風景連作画が、風景を中心的内容とする俯瞰構図という共通点で以って、陰鬱が生む世界の人間と自然との対峙性を最も率直に強調し、陰鬱という風土の空間特有性そのものに向けられた本質的な「内へと向かう精神性」の表現が成されたものであるのだ。ピーテル・ブリューゲル自身が陰鬱という風土に存在を了解したからこそ、制作背景や年代の異なる2つの風景画においてもこのような共通性が見出されるのであり、そういった意味において風景画制作の要因が決して外的なものだけではないことが分かるのである。</p>					